

<会員のひろば>

「まちづくり」はオモロイでー

＝H U－N E Tかわにし準備会（仮称）にまつわる一私見について＝

竹腰 英樹（兵庫県／団体職員）

川西市文化会館の一室の光景より

「千里の道も梅田から…」会社員のY氏が真顔で言う。学生のK君が「ホンマにそう言うんですかあ…」議題を決めて話をしている、つい冗談が出てしまう。メンバーの差し入れのお菓子に手が伸びるのは夕食時を過ぎたからである――。

兵庫県川西市に住む（働く）若者が、「HUMAN NETWORK CITY MEETING（以下、H U－N E Tと略）」という集まりの準備会を作ったのは93年の秋である。それ以後、月におよそ1～2回の例会を積み重ね、その回数は20回近くになる。正式なスタートは95年の早い時期を目指している。「人と人とのつながりを大切に、川西をとにかく楽しい街にする」（会則案より）というのが、この会のキーワードであり、95年は「かわにしを歩く」ことからスタートしたいと考えている。

川西市総合計画審議会がそのきっかけだった

93年度からの10ヵ年の総合計画を策定する際、市が重視したのは職員参加と市民参加だった。後者の一つの～そして全国から注目された～手法として16歳から30歳未満の若い世代の審議会委員が一般公募された。審議会そのものは91年8月からおよそ1年で基本構想案を審議、答申して終わったのだが、「このまま別れたくない」「川西にもっとこだわっていきたい」「何かおもしろいことをしてみたい」と思った有志が呼びかけ、発足したのがこのH U－N E Tかわにし（準備会）である。

やりたいことをどんどんやろう

会議のやり方一つとってもすぐに冗談で脱線したり、言いだしっぺが幹事になって進行するなど、良く言えばフレキシブル、悪く言えばちゃらんぼらん部分がある。メンバーは学生、会社員、自営業など様々な集まりであり、H U－N E Tの他にもサークルやボランティア等々で多忙な面々で

あるが、そんな忙しさの中で土曜日の夕方から夜にかけて、話し合いを行なっている。会場費は一回の参加につき千円ずつ出し合った中から出している。そんな手弁当の集まりを続けてきたパワーはどこから出てくるのだろうか？

一つは、私達が住み、働く川西というまちへの愛着なり、こだわりであろう。

二つ目は、誰もが対等な組織であり、このことが自主性を引き出すきっかけとなっているのだろう。つまり、「言う人一言われる人」といった「やらされ感」発生システムでない「一人一人が主人公」のシステムがあるからだろう。

三つ目は、集まったメンバーの性格が「いろんなことに頭を突っ込みたい」「楽しみたい」からであろう。

私自身、地方自治体≒首長選挙であるとか、「役所は住民の要求をぶつける相手」などと思っていたが、審議会やH U－N E Tに関わる中で、「まちづくりの主体者として自分はなにすべきか、何ができるか？」ということ考えはじめ、住民本位の施策を行なう自治体に話を聞きに行ったり、まちづくり、むらおこしを一つの大きなテーマとしている青年団の取り組みに学ぼうとしつつあるところである。

川西というまちからのスタート

95年はH U－N E Tの本格的なスタートの年である。これまでともすれば会議中心だったこともあるが、まずは「まちに出ること」にこだわりたい。駅前ビルや商店街を歩いたり、キャンプや「ゲートボール＋温泉」というプランも出されている。仲間とともに川西のまちづくりに楽しく、多面的に関わりたい。

（なお、筆者はH U－N E Tの事務局であるが、この文章は個人的な文章である。）